

《5》 2021年度からの大学入試について

大学入試センター試験は2020年度入試で終わり、2021年度入試からは「大学入学共通テスト」に変わります。共通テストの概要と入試の仕組みについて確認してください。

なぜ今、高大接続改革をおこなうのか？

1. 判断基準のシフト

今の、高校生や中学生が社会の中心で活躍する数十年後には、日本国内では少子高齢化による人口減少が進み、世界規模では国境というボーダーを超えるグローバル化がさらに拡大すると予想されています。また、「第4次産業革命」ともいわれる、AI（人工知能）の活用が、我々の身近な日常生活にも広がっていきます。すると、単純な肉体労働だけでなく、かなり高度な知的労働も機械に取って代わられてしまう社会になってしまいかもしれません。まさに、SFの中の世界がすぐそこまで迫っています。

すると、学力の評価も今までの「知識・技能」の量を基準としたものから、人間だけがもっている「思考力、判断力、表現力」を重視したものへと変化していくことは避けられません。また、グローバル化がさらに進んでいくことから、「世界共通語」ともいえる英語を自由に操るために、4技能(読む、書く、聞く、話す)をバランスよく身につける必要があります。さらに、外国人など育った環境や文化が異なる多様な人々と一緒になって、自らが率先して考え、そして物事を成し遂げていく能力が、今まで以上に重要で不可欠なものになってきます。

2. 一方通行の「講義」から「アクティブラーニング」へ

社会が変わっていく中で、必要となるものも変化していきます。この変化に対応するために、大学教育も小中学校の教育も先生から学生・生徒への一方的な講義形式から、学生・生徒が中心になってグループ討議などを交えて学んでいく「アクティブラーニング」が主流となりつつあります。もちろん、高校の教育もこのような流れを避けていくことはできません。しかしながら、残念なことに大学入試が旧態依然としたままでは、従来の座学中心、知識・技能の習得中心の学習から脱却することはなかなかできません。このような背景があって、高大接続（大学入試）改革が今盛んにいわれるようになっていきます。

高校3年生や2年生の生徒のみなさんには、「大きな改革の時期にあたってしまっただ変だ」「なぜ、自分がこんな変革期でつらい目に合うのだろう」といったネガティブなとらえ方ではなく、「大きな変革期を迎えるこれからの時代に即した最新の学力を身につけることができ、大学入試ではその最新の学力への評価によって選考が行われること」をプラス思考でとらえてもらいたいと思います。

大学入学共通テストとは？

1. 実施日程、出題教科・科目はセンター試験と同様

これまで実施されてきた大学入試センター試験（以下「センター試験」）は2020年度入試で終わり、2021年度入試からは「大学入学共通テスト」（以下「共通テスト」）に変わります。共通テストは、センター試験と同様に1月の中下旬の2日間で実施されます。初回の実施は2021年1月16日(土)・17日(日)で、センター試験と同様の6教科30科目（次ページ表1）が出題されます。各教科内の科目の選択方法もセンター試験と同様です。

2. 問題作成の方向性

共通テストは、「知識・技能」だけでなく、大学入学段階で求められる「思考力・判断力・表現力」を一層重視するという考え方がベースにあり、作問や出題形式を含めて見直しが進められています。センター試験に続いて共通テストの作問を行う大学入試センターは、2017・2018年度に大掛かりな試行調査（プレテスト）

を実施しました。実施後に受験結果を分析し、それを踏まえた共通テストの問題作成の方向性が公表されています。こうした試行調査や公表資料の内容から、現在のセンター試験と比較して、共通テストの作問の方向性としてうかがえる特徴を挙げてみます。

(1) 「知識の理解の質を問う」「思考力・判断力・表現力を活用して解く」問題を一層重視

問題作成の基本的な考え方として、「知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する」としています。センター試験においてもこうした問題が出題されていなかったわけではなく、問題の評価・改善が重ねられて実施されてきました。大学入試センターが示した問題作成方針のなかでも「センター試験における良問の蓄積を受け継ぎつつ」とあり、共通テストはこうしたセンター試験の実績をベースに実施されます。

(2) 問題の場面設定

授業において学習する場面、社会生活や日常生活の中から課題を発見し解決する方法を構想する場面、資料やデータなどを基に考察する場面など、学習過程を意識した場面設定を重視するとしています。こうした問題作成の方向性は、試行調査の問題からもうかがえます。

(3) 必要な情報を組み合わせて思考・判断させる問題

文章・図・資料などの複数の情報を提示し、必要な情報を読み取る力や、読み取った情報を比較したり組み合わせたりして、課題を解決する力を問うことを意識した問題が出題されそうです。

なお、2018年度に実施した試行調査では、平均得点率が5割になるよう作問されました。現在、大学入試センターから公表されている問題作成方針では、共通テストで想定する平均得点率は明示されていませんが同様の得点率を想定して作問されると考えられます。

表1 2021年度大学入学共通テスト 出題教科・科目

教科	出題科目	科目選択方法	解答時間	配点
国語	「国語」		80分	200点
地理 歴史	「世界史A」「世界史B」 「日本史A」「日本史B」 「地理A」「地理B」	最大2科目選択 (同一名称含む科目の組合せ不可)	1科目60分	1科目100点
公民	「現代社会」「倫理」 「政治・経済」 「倫理、政治・経済」			
数学	① 「数学Ⅰ」 「数学Ⅰ・数学A」	1科目選択	70分	100点
	② 「数学Ⅱ」 「数学Ⅱ・数学B」 「簿記・会計」 「情報関係基礎」	1科目選択	60分	100点
理科	① 「物理基礎」「化学基礎」 「生物基礎」「地学基礎」	A～Dの選択方法により科目選択 A：理科①2科目 B：理科②1科目 C：理科①2科目+理科②1科目 D：理科②2科目	理科① 2科目60分 理科② 1科目60分	理科① 2科目100点 理科② 1科目100点
	② 「物理」「化学」 「生物」「地学」			
外国語	「英語（リーディング、リスニング）」 「ドイツ語」「フランス語」 「中国語」「韓国語」	1科目選択	英語 リーディング80分 リスニング30分 その他80分	英語 リーディング100点 リスニング100点 その他200点

3. 英語筆記は「リーディング」に改称、「リスニング」と同配点に

外国語の「英語」については、名称や配点が変更されます。センター試験では英語受験者には「筆記」と「リスニング」が課されていましたが、「筆記」は「リーディング」に改称されるとともに、配点が200点から100点に変更されます。一方、「リスニング」の配点は50点から100点に変更され、「リーディング」と同配点になります。

「リーディング」では、さまざまなテキスト（文章や文献がひとまとまりになっているもの）から概要や要点を把握する力や、必要とする情報を読み取る力などを問うことをねらいとし、センター試験で出題されていたような、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う出題はなくなります。

「リスニング」では、読み上げられる音声の回数が、問題により1回読みを含めたもの（センター試験はすべて2回読みで実施）が出題されます。

大学入試センター試験	大学入学共通テスト
<ul style="list-style-type: none">● 筆記（200点） 発音、アクセント、語句整序など単独で問う問題を出題● リスニング（50点） 読み上げられる音声の回数は、全て2回読み	<ul style="list-style-type: none">● リーディング（100点） 発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題の出題はない● リスニング（100点） 読み上げられる音声の回数は、問題により1回読み、2回読みのものが混在

共通テストにおける「リーディング」と「リスニング」の配点費比は1：1ですが、各大学が成績利用する際は、配点比を自由に設定できます。公表されている大学の状況をみると、多いパターンとしては、そのまま「1：1」とする大学のほか、「4：1」「3：1」とする大学に分かれています。

4. その他の変更点

数学①（数学Ⅰ、数学Ⅰ・数学A）では記述式問題の導入は見送られましたが、当初想定していた問題分量は変えないことから、試験時間は70分となります。

国語では記述式の問題が見送られたことで、近代以降の文章（現代文）の出題はセンター試験と同様の大問2問となります。ただし、これまでのセンター試験では「評論」「小説」が題材となっていましたが、共通テストでは「論理的な文章」「文学的な文章」「実用的な文章」を題材とするとされました。また、大問ごとにひとつの題材で問題を作成するのではなく、異なる種類や分野の文章を組み合わせた問題を検討するとしています。2018年度の試行調査でも、実用的な文章（著作権を題材としたポスター、法律の条文）と論理的な文章を組み合わせた問題が出題されていました。センター試験では扱われなかった素材です。

理科②では、センター試験には選択問題が出題されていましたが、共通テストでは出題されないこととなりました。

大学へ提供される各教科・科目の成績は、配点に対する得点のほか、新たに9段階の段階評価が提供されます。この段階評価は、その科目の受験者の得点状況から算出されるため、得点と段階の関係は科目により異なります。各科目の得点は、試験当日に公表される配点・解答をもとに自己採点をすることで、試験当日には自分の得点を確認できますが、段階評価は全受験生の成績集計終了後でないと確定しませんので、試験実施数日後の公表となる見込みです。大学の用途としては、指定した段階以上であれば出願資格を満たすといったような、出願基準での活用が想定されますが、導入当初は馴染みがないことから、この段階別評価が入試に用いられる可能性は小さいと考えられます。

英語の資格・検定試験の活用について

1. 英語4技能の重視と資格・検定試験の活用

グローバル化が急速に進展するなか、英語のコミュニケーション能力を重視する観点から、国は、大学入試においても4技能（読む・聞く・書く・話す）を評価する方向性を示しました。しかしながら、各大学が実施する英語の試験において、リスニング（聞く）やスピーキング（話す）を実施するのは実施上の負担が大きいこともあり、これまでの大学入試はリーディング（読む）が中心でした。そこで、4技能評価を入試に組み込むために民間の英語の資格・検定試験を活用する動きが拡大しています。

英語の資格・検定試験の活用は、かねてよりAO入試や推薦入試において資格・検定試験の成績取得者を優遇するといったものがありましたが、一般入試においても徐々に導入が広がっています。

当初、大学入試センターが資格・検定試験の成績を管理する「大学入試英語成績提供システム」の運用が予定されていましたが、昨年11月に導入見送りになりました。ただし、「英語4技能評価の推進」という方向性は変わっていません。英語資格・検定試験を活用した入試がなくなるわけではなく、むしろ今後も拡大していくことが予想されます。

2. 大学の英語資格・検定試験活用方法と確認事項

英語資格・検定試験の活用は、大学により、あるいは同じ大学のなかでも入試方式により、活用方法が異なるケースがみられます。英語資格・検定試験の活用方法は、主に「出願資格として利用する」「成績に応じて個別試験（またはセンター試験）の英語等の成績に加点する」「個別試験の英語の受験を免除する」といったものがあります。私立大学の一般選抜では、複数ある入試方式の1つとして、英語の資格・検定試験の成績を必須として提出させる入試方式を設定する大学が目立ちます。活用方法のほかに確認したいのは、利用可能な資格・検定試験の種類と受験期間です。これらも大学によって異なります。受験期間は「2年以内に受験した試験の成績」と指定されているケースが多くなっています。英語資格・検定試験の成績は必須ではなく、成績提出を任意とするケースもあります。この点も確認のポイントです。しっかり、確認して下さい。

大学入学共通テストへの不安について

共通テストは現行のセンター試験の延長線上にあるものですが、それでも皆さんにとって不安は多いかと思います。

共通テストはマークシート方式問題であり、これはセンター試験と同じです。また、出題範囲も現行のセンター試験と同じです。過去問を利用した対策などには変化はありません。出題形式が少し変わるだけと思って下さい。しかも、新しい出題形式は2017年度・2018年度の2回の試行調査の出題から具体的な形式を知ることができます。それにそって、各種の模試では予想問題が出題されますから、それを活用して対策を立てることは難しいことではありません。もちろん、改革初年度で手探りになる部分が多いわけですから、先輩たちよりも共通テストをターゲットとした模試の受験回数を多めにして、新しい出題形式に慣れることが大切です。

主体性評価の重視

2021年度入試では、調査書や高校での活動歴も評価基準として重視しようという方針が出されています。

まず、調査書では「部活動、ボランティア活動、留学・海外経験等」「取得資格・検定等」「表彰・顕彰等の記録」などをより拡充する方針が出されています。また、高校時代のさまざまな活動歴を記録して、それを評価に使おうという動きも始まっています。こういった、教科の成績以外の評価を「主体性評価」と呼んでいますが、誤解してはいけないのは、あくまでも「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力」という2つの学力の要素が基盤であるということです。「元気」や「明るさ」だけで、難関大学を突破できるわけではないことは当然のことです。

こういった主体性評価は、一般選抜でも重視されるようになりますが、現実的には、事務的な煩雑さを考えると、まず全体の募集人員の中で限られた人数に限って使われると思われます。そこで、最初はAO入試や推

薦入試から活用が広まると思われます。

ところで、2021年度入試から、AO入試は「総合型選抜」、推薦入試は「学校推薦型選抜」と名称を改め、全体の選抜日程を後ろ倒しにします。日程の後ろ倒しにより、早期に合格が決まり、それ以降の高校での学習に身が入らず、結果的に学力が低いまま大学に入学するという弊害を避けるためです。

さて、文部科学省は国立大学の総合型選抜や学校推薦型選抜の入学定員全体に占める割合を30%程度まで拡大する方針を示しています。また、難関国立大学でも後期日程を廃止・縮小して、総合型選抜や学校推薦型選抜に切り替えて、その募集人員も増やす大学が増加しています。このような流れで、主体性評価をより重視する入試への転換が進むことになります。

では、みなさんはどう対応すればよいのでしょうか？まずは、授業でも部活動でも他の学校行事でも自分で興味が持てる部分を見つけて、今まで以上に積極的に関わってみましょう。大学が重視しようとしているのは、結果（部活の大会やコンクールで入賞する、外部の資格や検定に合格するなど）ではありません。その過程での経験や体験を通して、みなさんが成長していった途中経過に期待しているのです。みなさんが社会人となるころには、日本も世界も社会の構造やシステムが大きく変わることが予想されています。そういった時代だからこそ、高校や大学時代にたくさんの経験をして、可能な限り自分から主体的に行動してみる。そのような姿勢がより重視されるのだと考えて下さい。

最後に、現在発表されている主体性評価の具体的な利用方法を見ると、全体としては、一般選抜では限られた大学にとどまっているのが実態のようです。

英共通テストにおける「リーディング」と「リスニング」の配点比、英語資格・検定試験の活用方法や主体性評価については、今後も様々な変更や具体的な内容が発表になります。必ず志望大学のホームページ等で最新情報を確認してください。